ミクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的枠組みに関する研究

－４つのシステムを用いた新しい理論モデル構築の試み－

○　関西学院大学　　石川　久展（876）

キーワード３つ：マクロソーシャルワーク、４つのシステム、二重構造モデル

１．研 究 目 的

ここ数年、社会福祉実践や福祉教育においてメゾ・マクロ実践の重要性が増してきている。ミクロ・メゾ・マクロの実践は、2007 年の社会福祉士法改正時に社会福祉士養成教育に位置づけられたが、その一方で、メゾ･マクロレベル実践とは一体どういうことなのか、社会福祉士養成の様々なテキストをみても、明確な定義はなく、またその内容や方法が十分説明されているとはいえない。それが故に、社会福祉士養成のカリキュラムにおいてメゾ・マクロ実践の演習や実習が未開発な部分がある。そこで、本論では、わが国におけるミクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の体系化を試み、その理論的な枠組み試案を提示し、ミクロ・メゾ・マクロ実践の理論的なモデル構築を検討することを目的とする。

２．研究の視点および方法

わが国においては、現在、政府が打ち出した「ニッポン一億総活躍」、「我が事・丸ごと地域共生社会」などのスローガンのもと、公的部門だけではカバーしきれない介護、福祉、保健・医療を地域社会や住民などのインフォーマルな部分によってカバーするよう働きかけている。このような社会動向の中で、ソーシャルワーク実践領域においては、近年、「地域を基盤としたソーシャルワーク」や「ジェネラリストソーシャルワーク」が重視されるようになり、メゾ・マクロ実践の必要性が一層増大している。また、国際グローバル定義を受けて、わが国独自のソーシャルワーク実践の定義や位置づけが求められている。しかし、わが国では、メゾ実践がマクロ実践に中に含まれるアメリカとは状況が異なり、日本の社会状況に即した独自のメゾ･マクロ実践が確立される必要があるが､先述したように、それらの明確な定義や理路的な枠組みが確立されているとは言い難い。

そこで、本研究は、ミクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的な枠組みを構築することを目的とした理論研究である。ピンカスとミナハンの４つのシステムモデルを縦軸に、ミクロ・メゾ・マクロ実践レベルをもう一つの横軸として、ミクロ・メゾ・マクロ実践を理論的に捉えようとしたものである。従って、本研究の方法は、ソーシャルワーク実践の理論研究であり、文献研究をベースとした創説研究を方法として採用する。

３．倫理的配慮

本研究は、ソーシャルワーク理論の構築に関する研究であり、特に倫理的な配慮は必要

ではない。なお、引用・参考については、学会の研究倫理指針の内容を遵守している。

４．研 究 結 果

本研究におけるミクロ・メゾ・マクロ実践の理論的な枠組みについては、２段階で検討する。まず、最初は、ミクロ・メゾ・マクロ実践のどれを採用するかという決定の段階である。個人や家族などのクライエントを対象としたミクロ実践においては、インテーク、アセスメント、支援計画、支援実施、モニタリングなどのソーシャルワークの支援プロセスが確立されているが、ワーカーが働きかける対象がクライエントだけではないメゾ・マクロレベルとなると、この援助プロセスをあてはめることができなくなり、援助する側のワーカーは、どのような枠組みで取り組んでいくのかわからなくなる。そいうことから、メゾ・マクロ実践を行う際にもミクロと同じように、ワーカーにとっての実践を決定する枠組みが必要となろう。ここでは、その枠組みを、実践のあり方を決めるための作業という点から「メタ実践モデル」と名付けることにする。「メタ実践モデル」は、PDCA(PLAN-DO-CECK-ACTION)サイクルをベースにし、PLAN の前に情報収集を行い、判断する ASSESSMENT を前に加えた A-PDCA サイクルとし、これに従って、ワーカーは、PLAN 時点でミクロ・メゾ・マクロのどの実践を行うかを決定することになる(詳細は当日配付資料で説明)。

２つ目の段階は、PLAN 時において、最初のメタ実践モデルで選択されたミクロ・メゾ・マクロ実践をより詳細に検討する段階である。ここでは、ピンカスとミナハンが提唱したワーカーシステム、クライエントシステム、ターゲットシステム、アクションシステムの４つのシステムを援用し、その４つのシステムを縦軸、ミクロ・メゾ・マクロレベルを横軸の２軸で捉えることになる。さらに、この２軸で捉えたミクロ・メゾ・マクロレベルについては、各レベルにおいて、その実践対象を個人、家族、集団、組織、地域、社会、国とさらに細分化して決定することになる。このように、ミクロ・メゾ・マクロ実践を４つのシステムで捉え、加えてミクロ・メゾ・マクロレベルでさらに対象となる単位を決定するという意味で２重構造になることから、ここではそれをソーシャルワークの「2 重構造モデル」と名付けることとする。これにより、ソーシャルワーカーは、誰が、誰のために、何をどのように実践するかを決定することができる。

５．考 察

本研究におけるミクロ・メゾ・マクロソーシャルワーク実践の理論的枠組みの詳細については、学会の口頭発表において当日、図などを用いて具体的に説明する予定であるが、ここで提示する理論的な枠組みは、これまで全く議論されてこなかったレベルでの議論であり、そういう点からすると、試論とも言えるものである。従って、本研究が今後の理論的枠組みの整理・発展に寄与するものと考える。